

副田 義也

欠落と尊厳の世代

——井上樹水「等ながら」に寄せて

等ながら

新世代は自殺する者が増えている
今朝も新聞の一面に載っていた
けれども問題は今日の世 等ながら

行かなくとも 貴に選んで行かなくとも
貴の目に行かなくとも 貴に選ば
つゝならば貴は今も心に居る
貴の持つ力は衰えられなくなる
それならば選ばない。

チノコは貴が世の貴族の問題を
誰か想像し得たとしてしなくては
ならない問題は今日の世 等ながら

行かなくとも 貴に選んで行かなくとも
貴の目に行かなくとも 貴に選ば
つゝならば貴は今も心に居る
貴の持つ力は衰えられなくなる
それならば選ばない。

I 尊厳

世に、ちやちやとノコトで世の貴族をまくる者も「し」なら。したか、多くは
、世のその断片に私にせよ。ある階級にそれだけ下り、そこに私にまた下り
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

II 尊厳

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

「等ながら」のほら、それであらう。それは、世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、
、あつたは、その断片を多くして、世に居る。世に居る、それはそれだけ下り、

~ラブソングに見られる女性心理の変化について~

待てるだけじゃ変わらないから
ぎつく縛った。"まの日記をもう一度開けて

1980年代、女性デュオ「あみん」の歌う『待つわ』という曲が多くの恋する女性の心をつかみ大ヒットした。サビの歌詞は以下のようにになっている。

私 待つわ いつまでも待つわ
たとえあなたが ふり向いてくれなくても
待つわ (待つわ) いつまでも待つわ
他の誰かに あなたがふられる日まで

この歌の主人公は好きな相手のことだけを想い、ひたすら「待つ」姿勢でいる。大変いじらしく、片想いをしている女性なら誰しも共感できるであろう。が、昨今では極めて珍しい「純愛」を描いたもので、「元祖ストーカーの歌」と呼ばれる意味も理解できる。

何故 知りあった日から半年過ぎても
あなたって手も握らない
I will follow you あなたに ついてゆきたい

こちらも1980年代にヒットした「松田聖子」が歌う『赤いスイートピー』の歌詞の一部だ。好きな彼が手を握ってくれるのを「待つ」。ひたすら、半年間も待っているのだ。『待つわ』で印象的なものこのような女性の待つ姿勢である。極めつけは、授業でも取り扱った「かぐや姫」の歌う『神田川』である。

二人で行った 横丁の風呂屋 一緒に出ようねって 言ったのに
いつも私が 待たされた 洗髪がなまで 冷えて

こちらは1970年代のヒット曲だが、待つ姿勢もここまでいくと歌身的という表現を超えて自虐的な行為に見えてくる。「彼を待たすまい!」という気持ちが強いからか、自分の髪を乾かすことよりも、彼女は「待つ」ことを優先させた。そもそも、この「風呂屋に一緒に行く」という設定がピンとこないし、電車の中でさえ鏡をのぞきこみ、化粧やヘアスタイルをととのえることを大事にする現代女性には別世界のことのように思えるのではないだろうか。少なくとも、私は「石鹸がカタカタ鳴る」まで女を待たせるような長風呂の男、その上、その女の「身体を抱いて 冷たいね」と、他人事のように言い放つ男は嫌だ。たとえ大好きな相手だとしても許せる自信が無い。

70~80年代に流行ったこの3曲に共通して言える特徴は、男性が女性より上に位置し、憧れや理想といった存在、ということだ。女性から何かアクションを起こすことは「美」とされていなかったのだろうか。「待つ」、「つくす」、「男の後をついていく」といったタイプの女性が普通で、望まれる男と女の形だったのかもしれない。

時は経ち、好きな男性に対する女性の姿勢も変わった。

受話器握りしめて 彼にダイアルした 友達以上になれるかな?
本気で恋したいから 今も大事なひとだから
勇気を出して飛び込もう この距離が近づくように

これは1990年代に「Every Little Thing」が歌った『SHAPES OF LOVE』の歌詞の一部である。先にあげた3曲よりも女性は恋に積極的になっているように見える。好きな人だからこそ、待ってはいられないのだ。

何にもしなきゃ何にもならない
自分の心にフィルターはいらない

こちらは「矢井田瞳」の歌う『My Sweet Darlin』の歌詞の一部、2000年の作品だ。もちろん、これは恋愛をテーマにした曲であり、「恋愛に対し積極的に行動しよう!」という女性への応援歌という意味合いもあるだろう。ちなみに、この曲には以下のような歌詞もある。

神様はいない
だって折ったもん 想いが届きますように折ったもん...

好きか異性に恋焦がれ、袖端に折ったり 目元をさめていたすこほなナニナニ

こちらは昨年の末にリリースされた歌手「aiko」のアルバムに入っている『彼の落書き』という曲の歌詞の一部である。片想いをしている男性への気持ちはまるで体中の落書きのようで、なかなか消えない、という内容の曲で、大変共感できる。aikoの曲は常に女性の視線から見た恋愛がテーマになっており、そのリアルな表現が人気である。

結局、松田聖子とかぐや姫の曲以外は全てが好きな人のことを想う女性の心情を歌ったものであるし、6曲ともそこに登場する女性は何の不満も無い「ラブラブカップル」というわけではないようだ。状況は似ているが、前3曲と後3曲では共感できる度合いが違う。第一に、前3曲に登場する女性はうまくいかない恋に満足しているように思えるのだ。

満足、とまでは言えなくても、あまりうまくいっていない状況を改善させるための努力をしていないように見える。おそらく、これらの曲をリアルタイムで聴いていた女性も「改善」が必要などとは感じなかっただろう。こういった、今見ると「もどかしい!」、「じれったい!」と言いたくなるような、いわゆる「純愛」が最も普通で、美しいものだったのだから。しかし、産業化が進み、女性の高学歴化、晩婚化という変化が生じ始めた。男尊女卑が幅をきかせていた時代は終わり、女性でも頑張れば社会で活躍できる、という新しい時代を迎えた。この「努力は報われる」という考え方が恋愛シーンでも適応されるようになったのであろう。それを象徴するのが後3曲である。好きな男性に電話をかける努力、だまって見ているは駄目だから行動をする努力、「待つ」ことをやめる努力をしている。幸せも喜びも誰かがくれる、そんな受け身の姿勢から、誰もくれないなら自分でとりいかになくては、という攻めの姿勢へと女性の生き方が変わっていったのだろう。もちろん、それは緊張するし、恥ずかしいし、本当に難しいことである。故に、歌になる。上手に伝えられる人、アーティストが片想いの女性心理を代弁し、背中を押してくれるのではないだろうか。かつての歌手が好きな人との憧れの気持ちを歌にしていたとしたら、今の歌手はもっと現実味を帯びた、人間くさい歌を歌っているように感じる。きれいなラブソングから、その歌を聴く人と同じ視点にたって、その人を勇気づけてあげようとする応援ラブソングになった、という考え方ができる。

第二に、後3曲に登場する女性達からは「自分も努力するから、あなたもそれに応えて!」という自己中心的な願望がこめられているように思う。『SHAPES OF LOVE』では1番の歌詞に「あなたを振り向かせるから 真剣に話をきいて」というストレートな願い、『My Sweet Darlin』では好きな「あなた」に対して「察して欲しいの」、「ここにきて」、「こっち向いて」、「いつものように視線を落とさないで」といった少女がオモチャをねだるような願い、『彼の落書き』でも「あたし」の気持ちに知らんぷりな「あなた」に「ねえこのかたまり冷えた心を今すぐ燃えとかしよ」と訴えている。まさに男女平等な恋愛が大原則として存在し、それを望むからこそその願望であろう。もちろん、これらを実際に口に出して言えるわけではない。それができなければ、結果はどうであれ、「片想い」の恋は終了しているはずだから。口に出しては言えない気持ちだが、どの女性も日夜願っていることだからこそ、その歌に力強さに共感、支持してしまうのであろう。

第三に、前3曲がスローでじっくり歌われているのに対し、後3曲はどれもアップテンポで明るく歌われたものである。一方は「つくす恋」にひたるため、もう一方は「うまくいかない恋」を楽しむため、という目的の違いが各々の曲調を生んだのではなからうか。基本的に大人の、「神聖」なものであった恋愛が、多少の刺激に動じなくなった社会においてゲーム感覚で楽しめるものになった証拠なのかもしれない。そして、やはり強くなった女性の姿がそこにはあるように思う。

各時代のラブソングを比べることで、時代と共に恋愛シーンにおける男女の形の変化がわかった。そこには社会に積極的に進出するようになった女性の心理変化が大きく影響し

ているのだろう。「美」とされる「恋愛」などなくなってしまい、定義づけするよりも個々人が楽しめる「恋愛」が望まれるようになったように思う。

ラブソングに両想いで幸せいっぱいなもの少なく、失恋、片想いの気持ちを歌った曲が多いのは、「叶わないかもしれないけれど、やはり好き」という想いこそが最も人々の共感を得られるものだからではないだろうか。幸せのド真ん中にいる人は歌に心の穴を埋めてもらう必要も無いが、そこより少しズレた人は沢山いるし、歌による「癒し」を求めているのだと思う。この原理はどの時代にも共通して言えることではないだろうか。